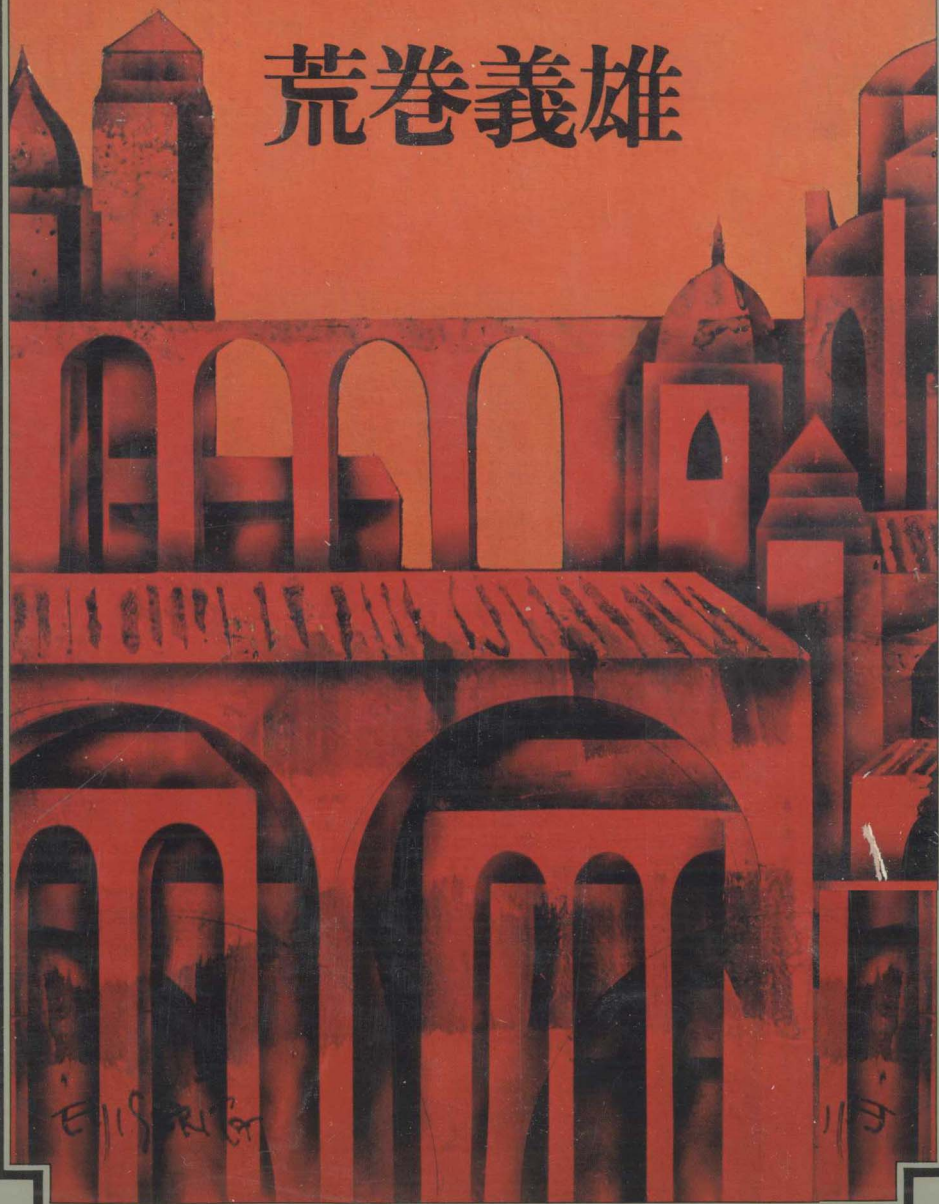


宇宙25時

荒卷義雄



宙25時

荒卷義雄



へあらまき・よしお

昭和8年、北海道小樽生れ。早稲田大学文学部、北海道大学土木科を卒業。札幌にあって家業を継ぐかたわらSF同人誌を主宰して自らも作品を発表。昭和45年「SFマガジン」に発表されたSF評論『術の小説論』短篇『大いなる正午』で一躍注目を浴びた。以後、独自のSF観に基づくハードSFのほか、近年は超古代史に材をとった伝奇roman、伝奇ミステリーの分野でも精力的な活躍を続け、異才が揃う日本SF界の中でも特異な光芒を放つ存在となっている。

著書に『柔らかない時計』『神聖な』『神鳴る永遠の回帰』『白き日旅立てば不死』『黄金の睡り』『空白の十字架』『晴れた日のウイーンは』などがある。

宇宙25時

昭和五十三年十二月三十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 荒巻義雄

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話東京(43)六三三一番(代表)

振替東京四一四四三九二番

乱丁・落丁本は本社またはお買求め書店にてお取り替えいたします

編集担当 久保寺 進

目次

レムリアの日	5
ああ荒野	47
無限への崩壊	91
宇宙25時	149
私の助走時代——あとがきに代えて	223

イラストレーション
デザイン
芹田 英治
矢島 高光

宇宙25時——荒卷義雄初期作品集②

レムリアの日

ここに天つ神諸の命以ちて、伊邪那岐の命
伊邪那美^{いざなみ}の命の二柱の神に詔りたまひて、こ
の漂へる国を修理め固め成せと、天の沼矛を
賜ひて、言依^{ことよ}さしたまひき

「古事記」

地史は単位、億年の物語である。

その日――。

はや数十億年の時が、たゆとう長き地球の地史に刻み込まれたある日のこと、レムリアの世界は見事に晴れわたっていた。

時は中生代、そのもつとも長かった最後の紀、白亜七〇〇万年がおわろうとしている頃、この北方大陸より南の水界へ鍵型に張りだした亜大陸は、うっそうとした密林とサバンナおよび砂漠によって占められ、あたかも、ひとつの別天地を形づくっているのだった。

はやゴンドワナはばらばらに解体していた。大部分が、海中に没しきっていた。レムリアはこのかつて南方世界に

君臨していた超巨大大陸の残滓^{ざんし}といわれる。すなわち、オーストラリア、南アメリカ、アフリカなどの南半球諸大陸とともに、ここレムリアは、超太古世界の名残りといえるのだ……。

事実、かつての世界地図はその様相を一変させているのである。たとえば、北米大陸よりアトランチス洋を越える巨大な陸橋がヨーロッパ西海岸に伸び、また陸化したベーリング海域はカナダ塊をアジアにつなげていた。むろんユーラシア大陸自身もまた変貌をとげている。地殻変動と海水位の上昇のためか、あの巨大なる大浅海テーチスの海（古地中海）を奥深くみちびき入れており、北方のフェノ・スカンディアと南のサハラ陸地や独立したアフリカ大陸を

分けへだてていた。

同様、この地もまた、みようによつては、インド洋上において、独立したひとつの世界ともみうけられる。古くはナルマダの地ともいわれた北方インド、および大島マダガスカルを南端にとりこみつつ、細長く形成された小大陸……。

噫々、レムリア!!

ライト・ブルーの白亜の海。

鮮かなセルリアン・ブルーの天。

その無限の広がり。雲ひとつない、底知れぬ深い青空。

正午の放つ光が、この太古の世界にみちていた。

あたかも眠るような時は、この地史的世界にふさわしく穏やかに流れているが、しかし確実で、また新しい扉を開こうとしている……。

たしかに権威ある学説によれば、この地レムリアこそ、われら現世人類の最も古き故郷であったといわれているのだ。この、白亜のインド洋に、おだやかに岸辺を洗われているこの地こそ……。

I

飛行体は、青銅色であった。

この物体は、底知れぬ蒼穹の一点より不意に現われ、目的地を目指して急速に近づいてきた。かろうじて姿勢を保っているが、傷つきながら傾いていることは確かだった。密林の梢をひき裂きながらかすめ過ぎ、やがて樹海の一点に埋没するように消える。

青い煙があがった。

樹上のキツネザルは、きよとんとその方角を眺めていたが、すぐに身を翻して葉陰の中に隠れた。

レムリアの静寂は、一瞬のことで、ふたたび、動物たちの騒音によって満たされるのであった。

青銅色の飛行体は、土中に斜めに突っこんだかたちで停っていた。進入方向にそって、きれいになぎ払われた熱帯樹が、まだ余燼をあげていた。キネズミの家族が、おそろおそろこの奇妙な天空からの落下物をみつめていた。天をおおう二層三層の樹林によって、いつもは薄暗い地上が、

この部分だけ青い空をのぞかせていた。

いったい、いずこよりの来訪者であったのか。薄色の煙をただよわせていた飛行体は、冷えきるのを待っていたように、その一角を開いた。

キネズミは驚き、最寄りの樹木へかけ昇る。幹のかげよりおそるおそる見守るうちに、蒼い人影が姿をあらわした。しばらくあたりの様子をうかがっている。

が、やがて振向くと、内部へ声をかけた。

「大丈夫です。イザミナス様」

「いまいくわ。ナギ……」

つづいて現われた蒼い人は、先の人影よりも小型であった。

「あちらへは、連絡いたしました。でも、鏡の塔もついに海にのみこまれたのか、通信は途中でと断えてしまいました」

「そうですか」

ナギと呼ばれた人影は、沈んだ声でこたえた。

「で、皇女様。他の乗員たちは……」

「駄目。みんな死んでしまったわ。生き残ったのは、お前とわたしだけのようね」

声は訝やかで気品がある。澄んだ紫色の衣裳を身にまといつかせ、小さな手をかざすと、樹間に開かれた白亜の天をみあげた。

「それにしても、わたしたち、よく救かったものですね」
地上におりたつと、ちらりと傾いた「船」をみやりながらいった。

「申しわけありません。すべてわたくしの責任です」

「いいえ。お前のせいではありませんよ。むしろ、わたしはお前の沈着振りをば、ほむべきでしょう。よくここまで「船」を持ちこたえさせてくれました……」

「いいえ。お恥しゅうございます。が、とあれ、このレムリアの世界までたどりつくことができたのは、不幸中の幸いでありました」

「おお、そうですとも。他の大陸にあつては、いまだに巨大な爬虫類どもが、わが物顔に這いまわっております。その点この大陸は、白亜紀の別天地といえそうですね」

「はい。皇女様が、この地をお選びなさったのは、賢明であられました。が、船長であるわたくしの未熟のため、部下たちを死なせたことが口惜しくなりません」

「いいえ、過ぎたことは惜しんでも仕方ありませんよ、

ナギ。ただ、参考のためおきしますが、原因は航時装置の不調だったのでしょうか」

「ちがいます。あれは、全く予期せぬ出来事でした。墜落のショックで、いまはもう使えませんが、あの瞬間まで航時機は正常だったのです」

「すると……」

小柄な人影は、おだやかな顔をかすかにかしげてきいた。「不運だったのですね」

「一瞬のことゆえ、避けえませんでした。が、いま考えてみて、わたくしは、そのことを予測して、出現地点をもっと安全な上空に選ぶべきでした」

「ああ。ではやはり、あの翼竜が原因だったのですね」

「はい、ほんのわずかの差でしたが、いまとなつては後の祭です。あのいまいまいしい黒い翼竜の尾の先端が運悪く後部機関部の同一空間で一致したため、小さな、いいえかなり大きな質量的な爆発が起きました」

「そうでしたか。事故というものは、えてして、些細な偶然の積み重ねによって起こるもの……。が、過ぎたことは、さっぱりとあきらめてください。不幸は不幸。大切なのは次の手段を考へることです」

「はい」

と答えて、重々しく一礼した人影は、まだ若者で、肩幅も広く筋肉質の体軀の持主であった。

「たとえば、わたしたちの国は海に沈みましたが、これは避けえなかったわたしたち蒼き種族の不幸。この事故とは較べものにならぬほど大きな不幸でした。が、わたしたちは、運命は運命として次の方策を考えて参りました。みな、努力したでしょう。はや残された時間はあまりなく、航時機の製作は、住民たち全員を救うまでいたりませんでした。が、少なくともお前とわたしとは、こうして、生きのびることができたのです」

「皇女様。他の皇族の方々はどうなつたでしょう」

「さあ。いまや確かめるすべはありませんね。女皇陛下であらせられたわたしの姉上は、鏡の塔を使って、妹の第三皇女は、石機械で飛びたちました。いずれにしても、わたしたちの行き先は、同じ地球のどこかであっても、それぞれ千万年、億年の単位の時の隔りがあります。わたしたちは、みなばらばらに散つたのです」

「すると、あのお二人の皇子様たちは……」

「ああ、姉のお子たちのことですね。まだ幼すぎたので、

わたしたち三人姉妹は相談して、「時の箱船」に乗せて逃がしてやりました」

「時の箱船……？」

「それは時空をただよう、時の葦船のこと。いいえ、蓮華の船……。その形は、王宮の池に咲く古代蓮華にもよく似ておりました」

「ああ、あの白く大きな……」

「そうです。なぜ、あの蓮華が、神聖園の池にあるのか、お前、ご存知でしたか」

「いいえ」

「では、白い蓮華型の円盤の存在はどうですか」

「はい、そのことなら」

「それが、わたしたち蒼き種族とどのような関わりがあるかも……」

「知っています。わたくしたちの先祖は、その蓮華型の円盤に乗って、遠い天空よりこの惑星にやってきたとか……」

「ええ、神官たちの考えでは、そのとおりです。王宮記録編纂所の古い伝承的な記録によれば、我々の故郷世界は、南の空に輝いてみえるとか」

「そうです……。でも、そのことをよくご存知でしたね」

「はい、わたくしの祖母が教えてくれました。祖母は以前、王宮の研究所にあがっていたのです」

「そうでしたか。はじめてきました。すると、お前も、王家の血を引く者だったのですね。ナギ……」

「はい、おおせのとおりですが。しかし、それも遠い昔のことです……」

「いいえ。それはいまこの白亜の世界に二人だけ生き残ったわたしたちにとっては、大切なことなのです」

「と、申されますと」

と、尋ねるナギにむかって皇女は、ふっと頬をそめた。

「それは、……」

といいかけて、言葉を濁した。瞳は理知を秘めている。額は秀いで、口元が意志的であった。「いや、いつかまたお話いたしましょう。ナギ、その前になすべき仕事がありますよ」

こうして新天地での最初の仕事は、遺骸たちの埋葬となつた。

「彼らの肉体を来世へ送りとどける儀式もかなわず残念ですね」

焼き払った空地に数体の屍体を並べたとき皇女がいった。

「止むをえません。あの災害とともに、我々の仲間たちも海の底に沈んでいったのですから」

「そうですね。でも形ばかりでも何か……。そう、祭司に代ってわたしが祈ってあげましょう」

彼女は、地にひざまずくナギを従え、起立して天を仰いだ。

細く裸はだかな両の腕かたが高くあがり、よく澄んだ美しい声が故郷星を呼んだ。

それは、漆黒の宇宙を光年の隔りを旅しつつ死者の靈魂たちが向かっていく故郷の地だ。地球の南半球の空に輝ける美しい星雲。その至福の世界にあつては、魂はふたたび万物の種子にたちもどり、転生のために休息のときを送る。それはまた、現象する万物の本質の状態でもあり、また存在の究極の姿ともいえる、と教義に教えられていた。

が、その状態は、決して生命あるものが進化していくことによって到達しうるものでもなければ、物質進化の極限の状態でもない。それは逆に、あらゆる現象するものの始りである。魂はそこへもどりゆく。始源の次元へ還っていくのだ。

なぜならば、この大宇宙さえもひとつの現象であり、本

質世界の無限の様態のひとつたる仮現の姿であるとするならば、一切は虚構だからである。

すなわち、本質たる種子の咲かせた虚構の華だからである。

それは、あたかも泥水のなかに咲いた蓮華のようなもの。夢の華。

虚無一切の泥沼、混沌カオスの泥海にぼっかり花咲いた美しい虚構の花。

それゆえ大宇宙そのものさえも、この蓮華と本質を同じうする……。

儀式がおわり、ナギはオリハルコンの光を遺体に浴びせかけた。傷ついた遺骸は、聖なる光を照射されて天へ昇っていった。

二人は、並んではや薄暗くなつた空を見あげていた。煙はゆっくりと舞い昇っていった。しのびよる闇の中で、彼らの姿さえもおぼろげである。

「さあ」

と皇女がナギをうながした。「よもやと思いますが、用心にこしたことはありません。万一、夜行性のけものがいると危険です。円盤の中にもどりましょう」

ナギはうなずく。

差し込まれた皇女のその手をとった。

不確かな足元に、皇女の体がよろめいた。抱きとめながら、ナギは、はじめてそのかくわしい体の匂いをかいだ。

2

高温多湿――。

原始の大ジャングルである。

とまどいがちだった異世界での生活にも、やがて彼らは慣れていった。そして、この主従たちは、新しい環境を観察しなおす、ゆとりをとりもどしていた。

古いゴンドワナ大陸系の植物に交替して、被子植物を中心とした、熱帯降雨林の発達がまず気づかれる点だった。最初知ったように、たしかに、巨大な爬虫類の君臨からのがれた、この地レムリアは、新しい種の動物たちにとって、天国といえそうだった。

着陸直前に手に入れた高空からの資料からも二人は、この白亜の大陸について、かなり詳しい予備知識を手に入れ

ている……。

このレムリアは、完全な熱帯地方で、南々東と南と北から火山脈によって隔離されていた。全体として割りと低い陸地だった。その内陸部に、これらの火山脈が障壁となつて、海洋の多湿な気塊の侵入をさまたげていた。したがって、ところどころに乾燥した森のない地域ができていたが、大部分はやはり、うっそうとした大森林におおわれているのだ。

ナギは、どちらかというと食糧の採取やその他こまごました現実的な仕事を依頼されていて周囲の事柄にあまり関心を払う暇はなかったが、その代り皇女は、彼女の知識欲を食欲なほど満たすことに余念がなかった。

「両棲類が多いわ」

と彼女はいつた。「ちよつと気味が悪いけど、足のない蛙もいるのね。それに、鳥類の多いのは、この白亜紀の特徴といえましようが、翼のない大きな鳥までいるらしいわ」

「どんな……」

ナギは、驚いて尋ねた。「大きさはどのくらいですか」「お前の背丈の二倍もあるかしら」

「皇女様。それは危険です。もし探険にいかれるなら、ぜひわたくしをお伴させてください」

「大丈夫よ、ナギ」

とイザミナス皇女は、彼の懸念をうち消すようにいった。「その巨鳥はとてもおとなしいの。それに、この土地には、狂暴な生き物はいないらしいわ。もし、気をつけなければいけないとすれば、蛇ね」

「たしかに、蛇類は多いですね」

「中には、毒を持っている種類もいるから、噛まれると大変よ。いいえ、蛇類だけではなく、昆虫類にも猛毒を持ったものがあるから、注意してね……」

皇女が教えてくれるこうした知識は、この未経験な大陸で生きのびるために、役立つことばかりなのである。

「皇女様。その巨鳥は、我々の食糧となりませんか」

「なるわ、きっと」

と彼女はいった。「ここからほど遠くないところに砂漠があるの。そこに沢山いるし、多分、近づいても逃げようとならないから、捕えるのは簡単ですよ」

新鮮な肉に飢えていたので、ナギは、早速、巨鳥狩に出掛けることにした。むろん、準備のために数日の日数をか

けた。

皇女が提案したのだ。「歩いてもいいけますが、捕った獲物を運んでくるのが問題よ」と。

「大丈夫。わたくしがかつぎます」

「おほほ……」

と皇女は笑った。「いくらお前が偉丈夫な若者でもちよつと無理ね。獲物は大きいし、それにジャングルを抜けるのが大変よ。蔓類が密生していて、ただ歩くだけでも難しいわ」

「では、何か、よいお考えがあるのですか」とナギが尋ねると、

「あります」と彼女は自信あり気にこたえた。

そして、ナギに手伝わせて造られたのが、一台のそりだった。ただのそりではなく、地面より浮きあがる乗物だった。なぜ、浮くのかナギにはわからなかったが……。

「わからなくて当然です。この浮揚の秘密を知っているのは、王宮でもほんの少数の者たちだけでした。ナギ、この円盤船も同じ原理で飛行してきたのですよ……」

といわれてもナギには、まだ理解できない。

イザミナス皇女は、手近にあった道具を床におとしてみ